

研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
A-11C	14-120	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門
題名 (原題/訳)		
Incident cancers attributable to alcohol consumption in Germany, 2010. 2010年のドイツにおける飲酒に起因するがんの発症		
執筆者		
Wienecke A, Barnes B, Neuhauser H, Kraywinkel K.		
掲載誌 Cancer Causes Control. 2015 Jun;26(6):903-11.		
キーワード		PMID
がん、飲酒、喫煙、人口寄与危険割合、ドイツ		25801899
要 旨		
目的： ドイツでは、飲酒に起因するがんに関する最新の情報に乏しい。そこで、飲酒に起因する大腸がん、肝がん、乳がん、上気道がんおよび上部消化管がんの発症率を推定した。さらに、上気道がんおよび上部消化管がんに対する飲酒の影響は、喫煙との交互作用を考慮に入れて検討した。		
方法： 2008～2011年にドイツ全国民を対象として行われた、飲酒および喫煙調査の成績を用いた。メタ解析から得られたがん発症に対する相対危険の統合結果から、人口寄与危険割合を算出した。さらに、2010年におけるがん発症の成績を用いて、飲酒に起因するがん発症数を算出した。		
結果： ドイツでは、2010年に飲酒に起因するがんが13,000例（全がんの3%）において発症していた。人口寄与危険割合が最も高いのは食道がん（男性47.6%、女性35.8%）、最も低いのは男性では大腸がん（9.7%）、女性では乳がん（6.6%）であった。女性では、中等度の飲酒（1日3杯）における人口寄与危険割合が最も高かった。一方、男性では、多量飲酒の人口寄与危険割合が高かった。喫煙者における中等度および多量飲酒者の人口寄与危険割合は、非喫煙者よりも高かった。		
結論： ドイツでは飲酒に起因するがんが非常に多い。中等度飲酒の段階から、多くのがんが引き起こされている。特に喫煙者における飲酒は、上気道がんおよび上部消化管がんのリスクを非常に高める。ドイツのがん予防対策において、節酒は重要な要因であると考えられる。		